

通史：半世紀のあゆみ

青春のパライストラ

第2期黄金時代

編集 部

1. 昭和34年（1959）・佐々木監督に

風俗・流行・歌 受験激化「3当4落」/
カミナリ族・ビート族/♪『黒い花びら』

前年の昭和33年をもって松井監督が勇退し、この年から佐々木敬が第3代目の監督に就任した。監督就任の春3月、幸先の良いことにこの年の米国遠征に4回生の西脇義隆（前年度主将）が選抜されることになった。西脇は全米選手権大会でフリーのフェザー級で優勝し、グレコでも第2位に



写真▷「米国遠征」の西脇さん
（西脇＝右端・左端は八田会長）

入賞した。ここ暫くの関大全体の不振ムードを吹き飛ばしてくれるのかと思わせる活躍ではあった。その西脇は卒業と同時に佐々木監督を補佐するコーチに就任することになる。

この年の主将は住本で、副将山本、主務に三好（現・樋口）、それに岸上と金谷の4回生がリーダーシップをとって、優勝奪回を目指したのではあるが、伝えられていた劣勢を跳ね返すことができずに、春も秋も、関学に敗れてしまった。

この年、10月に、東京五輪の日本開催が決定している。この決定とともに、日本スポーツは総力をあげて、強化対策に乗り出すのだが、この機運に関西大学レスリング部も影響されて、部員の幾人かは照準を「東京」に向けることになる。

2. 昭和35年（1960）・ローマ五輪

風俗・流行・歌 インスタント時代到来
/だっちゃん/♪『誰よりも君を愛す』

この年は33年の新入生組が力をつけ、木田（現・堀江）主将のもとに、中川副将、矢路主務、梶

原（現・白井）、竹田、瀬脇らの4回生を軸に、春も秋も連勝している。そしていわゆる第2期黄金時代の幕開けの年となった。ここに「実力接近で興味あり」の予想が報じられたものがある。

関学は清水、鎌田をはじめポイントゲッターが多数卒業した痛手はあるが、今春5人の若手選手を渡米させて、経験からくる自信と技のバラエティーを一層つけてきたことが大きなプラスになっている。関大は昨年のメンバーをそのままにこんどこそ4季連続優勝の関学を倒そうと張り切っている。関学、関大のメンバーを比べると、関学は出雲（ウェルター）、沼（ライト）、藤井（ウェルター）、久保（フライ）、坂本（フェザー）、大林（フライ）、石田（バンタム）、関大は市口（フライ）、福家（ライト）、神谷（フェザー）、森（ミドル）、梶原（ウェルター）、木田（ライト）、矢路（ウェルター）が主力。とくに関学は出雲、沼、久保がほぼ確実に3点をあげる。関大は関西で無敵といわれる市口と森の2点がかたい。ウェルター級までは2人の選

手が出場するのでこれらの選手が相手校の頼む選手と当たってそれを食い、勢いにまかせて1つの級で2点をあげれば形勢は大きく変わる。とくに関大の頼む福家が関学の沼とあたるかどうか試合を大きく左右する。（『毎日新聞』・日付不詳）

春のリーグ戦は、予想に違わず、「関大⑤-5関学」の同点で内容勝ちというきわどい勝利で、関大が、5シーズン振りに優勝を飾った。秋も春とまったく同じ展開で関大が同点内容勝ちで関学を破っている。

この年のトピックは市口政光のローマ五輪出場である。3年生の市口はその幸運を手中にし、関西大学レスリング史上初の「オリンピック選手」に輝くこととなった。惜しくも7位の成績に終わっているのだが、快挙であった。それをもって関大レスリングの「名」を広く内外に轟かせてくれたことになる。この五輪に先立っての最終予選会では、「バンタム級は最激戦のクラスで、桜間、大谷、市口、吉田……といずれをとっても実力伯



写真▷ローマ五輪の「日本チーム」
（市口=後列左から4人目）

仲」といわれたなかを勝ち進んで、「初めての海外遠征」をオリンピックで実現することになる。佐々木監督はその喜びを次のように書きとどめている。

◇

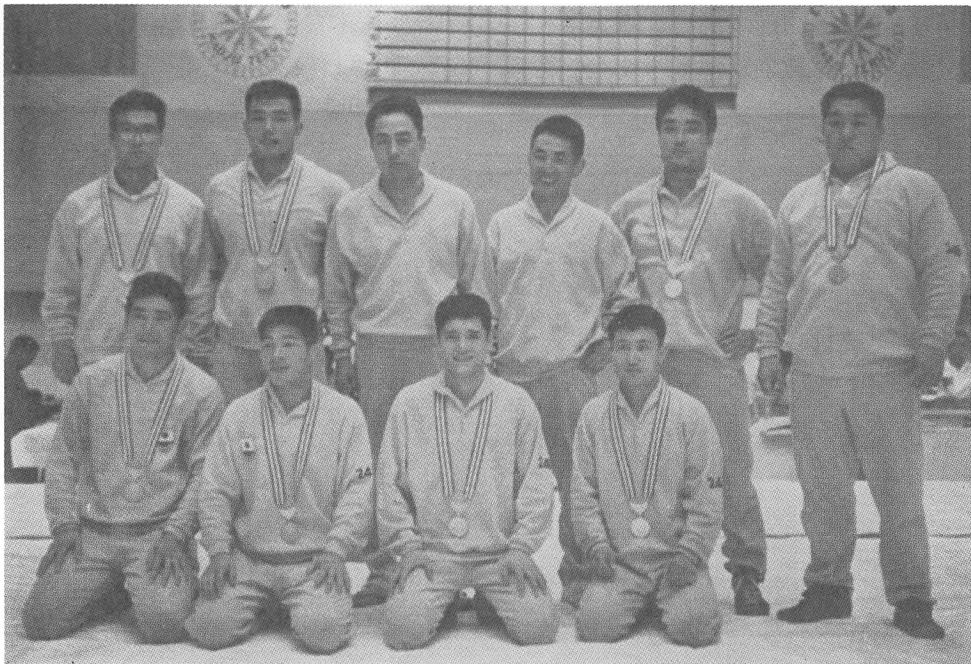
最終予選会でトップにおどりてた市口の成果を、当時随行していた2回生の伴が「ローマ近し」の電文で知らせてきて、関西大学関係者一同は長年の夢の実現を「代表決定」に託したのであります。(佐々木)

◇

関大初代監督の村田恒太郎は、このとき、日本レスリング協会の要職にあった。2代目監督の松井清も理事に名を連ねている。最終予選を優勝で飾ったものの、市口には、「代表決定」までの評議が立ちふさがっている。そこで推されれば「ローマ行き」の本決まりだ。村田と松井の存在が大い

に頼もしく感じられたのは、すべての関係者にとって、偽りのない心情であった。

前回のメルボルン五輪で日本レスリングは好成績をあげている。一躍「オリンピックに強いレスリング」というトレードマークが誰いうともなく成立していた。ところでローマ五輪では、その強い「期待」に十全に応えることができなかった。しかしながら、フリーフライ級の松原が銀メダルを獲得して、一人して覇気を見せてくれはしている。日本レスリング陣の公約は「金メダル」だった。そして、金メダルを逸した日本レスリング協会指導陣が「丸坊主」でタラップを降りてきた話は語り種になっている。既に東京五輪の開催が決まっている。日本レスリングは、金メダルを逸したローマの地で、コーチ陣全員が「頭を剃って」その日から、強化に乗り出す決意を「記号」として世間に発信したのであった。



写真▷第4回アジア大会の「メダリスト」たち
(市口=前列右から2人目)

3. 昭和36年(1961)・横浜世界大会

風俗・流行・歌 巨人・大鷗・玉子焼き
／睡眠薬遊び／♪『上を向いて歩こう』

この年の4回生は12名もいる。いずれもが充実して、関大のチーム力は、かつてない強力な陣容である。主将市口、副将福家、主務松田、荒武、神谷、桂、岸田、高田、松浪、森、吉村、中野の4回生に加えて、下級生にも好選手がひしめいている。ローマ五輪選手を輩出したチームの自覚も備わってきていた。春と秋のリーグ戦を無難に勝って4連覇を飾ったのだが、個人戦でも大いに活躍している。その筆頭は世界選手権大会で優勝を果たした市口政光であった。佐々木手記を「30周年記念誌」から引いておきたい。

◇

個人戦では、市口のグレコでの五輪出場の影響で「グレコの関大」といわれる素地ができて、この年横浜で開催された世界選手権大会の予選会では、まず3月の第2次予選会でフライ級山本3位、バンタム級市口優勝、同伴4位、ライト級石井3位となり、最終予選出場資格を獲得しております。4月28日からの最終予選会ではバンタム級市口優勝、同伴3位で、市口は代表の座をまもりグレコの第1人者への道を着実に踏み固めました。

本番の世界選手権では、期待されていた市口は実力を十分に発揮できず惜敗しましたが、この経験が彼の研究熱心さを一段と強めて東京五輪へと夢を馳せさせたのであります。

この年11月より45日間におよぶソ連・欧州遠征が東京五輪の強化対策の一環として実施され、これに参加した市口は「8勝1敗」の好成績をあげて確実に成長していったのであります。

(佐々木)

4. 昭和37年(1962)・市口の優勝

風俗・流行・歌 無責任時代・青田買い
／ツイスト／♪『いつでも夢を』

春が第2次黄金時代の仕上げとなった。この春12名という卒業生を送りだしている。痛手である。極端に戦力が落ちてしまった。そのなかで、伴主将、光富副将、西本主務のもとによく健闘して、春は、大いに苦戦したものの優勝して5連覇を成し遂げている。この成績は、昭和29年秋より始まって31年秋に達成した第1次黄金時代の総仕上げの「5連覇」につぐ快挙である。だが秋にはチーム力の低下をカバーできずに敗れている。

ただし個人戦では、松井清前監督を団長としてのソ連・ルーマニア遠征に山本定夫がフライ級の代表として参加し、また市口政光(OB)が世界選手権大会やアジア大会で活躍するなど、関大勢の快進撃は続いている。

この年市口は、米国トレード市で開催された世界選手権大会で、日本人として、初めての世界チャンピオンに輝くこととなった。また続く第4回アジア大会でも、市口は、金メダルを手中にすることになる。ここにグレコの第1人者「市口」が誕生したのである。

王者となった市口の「念願果たした喜び」と題する一文がある。日本レスリング協会「機関誌」に載った、東京五輪に向けての、公約でもある。

◇

私が本格的にレスリングをはじめたのは、大学入学と同時に関西大学レスリング部に籍を置いていたのですが、大学2年生で初めて関西選手権大会で優勝したところで、この頃よりレスリング競技に深く興味を覚え、寝ても起きてもレスリングのことを考え、ひそかに第1線級に野望を燃やしは

じめた時代でありました。

大学3年にしてローマ・オリンピック最終予選で優勝し、おもしろいだけでなく、晴れてローマ五輪代表に選ばれました。しかしその時代のグレコローマンスタイルは、日本においては、技術が欧州各国にくらべて低く、(日本での取り組みも)結成以来2年間という歴史の浅いものでした。当然のことにローマ五輪の結果は火を見るより明らかでした。しかしフライ級の平田さんが4位に入賞、北村さんが6位、小生が7位とよく健闘し、東京五輪には、少しは立派な成績を残す自信を持って帰ってまいりました。

その後、昨年の6月横浜で世界大会が開かれ、我々も健闘して頑張りましたが、まだまだでした。その年にトルコよりコーチを招き技術指導をしてもらって試合に臨みましたが、惨敗の結果となりました。

その年の11月のソ連・欧州遠征で、欧州の技術を目の当たりに見て大きく自信を持ち、また成績も8勝1敗とこれにまた強く自信をもったしいです。今年の米国の世界大会、アジア大会と優勝、その結果、3年目にして念願を果たせてこのうえもない喜びでした。新たな闘志と努力をもって東京オリンピックに頑張る覚悟です。(市口)



この「覚悟」が練成されて、公約どおりに、東京五輪で金メダルとなって結実することになる。

5. 昭和38年(1963)・個人戦の活躍

風俗・流行・歌 スーパーマーケット・カギッ子/ボウリング/♪『高校三年生』

3月に「第1体育館」の竣成。新しい練習場が

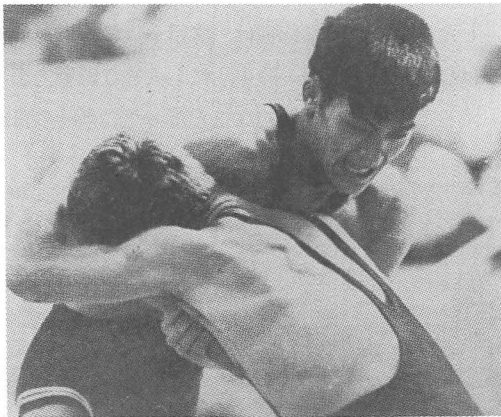
できた。これまでの体育館は、野球場に隣接した「小体育館」で、わずか140畳ばかりの面積しかなく、そこを、確か「レスリング」と「柔道」とが、そして「器械体操」と「剣道」がそれぞれペアを組んで、午前と午後のいずれかを2部が同時に交替しながら使用していた。器械体操部が跳馬を練習する際には、すべての部の練習が終わった時刻を見計らって、部屋いっぱい長い方の対角線上に走路をとって場所を確保していたようである。しかもその小体育館の天井は低く、鉄棒の練習時には、大車輪などの大技で足がその天井につきそうなほどでもあった。だが新体育館ができて格段の環境変化となった。しかし主将石井、副将山本、主務井宮、遠藤、小沢、脇田、中川らのリーダーシップのもとに臨んだものの、この春のリーグ戦は第2位で、そして秋は第3位であった。



写真▷「米国遠征」の伴さん・石井さん
(伴=左・石井=右)

一方関大勢の個人戦では華々しい年である。3月の前年度の主将伴義孝と石井正樹の2名がこの年の米国遠征日本代表に選ばれている。そして伴はグレコローマンスタイルのフェザー級で第3位に入賞している。7月にスウェーデンで開催された世界選手権大会にグレコローマンスタイルのフライ級に山本定夫が出場して、第5位に入賞して

いる。この山本の入賞はその前年の「ソ連・ルーマニア遠征」の成果の現れでもあった。10月にはプレオリンピック大会として、横浜で、「東京国際スポーツ大会」が開催されている。ソ連、米国、ハンガリー、ルーマニアなど8カ国を招待している。この大会では、市口（OB）が優勝、伴（OB）が5位に入賞している。



写真▷1963年世界選手権大会5位の山本さん

6. 昭和39年（1964）・東京五輪

風俗・流行・歌 モータリゼーション／
ウルトラC／♪『アンコ椿は恋の花』

ここのところ3連敗の関大レスリング。奪回して氣勢をあげて、東京五輪を目指す仲間のためにも弾みをつけたいものである。部員一同は、張り切ってスタートを切った。主将村山、副将藤井、主務丹羽、岸本、鶴谷、西尾、平田らの4年生組は必勝を期してシーズンに突入。果せるかな春は5戦全勝で4シーズンぶりに優勝。先駆けてこの

年度の主将の村山栄治と副将の藤井敏治が武者修行のために「米国遠征」に出掛け、実力をつけてきた。これで万全である。これまでの劣勢を跳ね返す素地が整った。そして見事に「春」を飾った。

さらに連覇を目指す秋のために猛練習を積み重ねた。そして秋にも優勝。秋には「粒ぞろいの関大」と評されて、「まず今春優勝して同大から王座を奪い返し16回目の優勝を遂げた関大は軽量級に、村山、山本、重量級に中野、藤田と各クラスに粒ぞろいの選手を揃え、バランスのとれたチーム力では相変わらずリーグ随一だ」の評判どおりに6戦全勝して念願の連覇を遂げている。この年の連勝から始まって、以後39年の村山主将（1976年没）、40年の早淵主将、41年の中野主将、42年の岡田主将、43年の倉橋主将、44年の北川主将の間の6年間12シーズン連続優勝という未曾有の大金字塔を樹立することになる。いわゆるその「12連覇」こそが第3次黄金時代である。

本節では、「第2黄金時代」を語ることになっている。第2黄金時代とは、昭和35年の木田主将、36年の市口主将、37年の伴主将の間の5連覇のことである。そういう意味では、その関係者の一人市口政光が、東京五輪で金メダルを獲得する昭和39年度は、いわゆる第3期黄金時代と輻輳するのではあるが、この「節」の締めくくりとしておきたい。それに相応しい佐々木監督の手記を「30周年記念誌」から引いておこう。



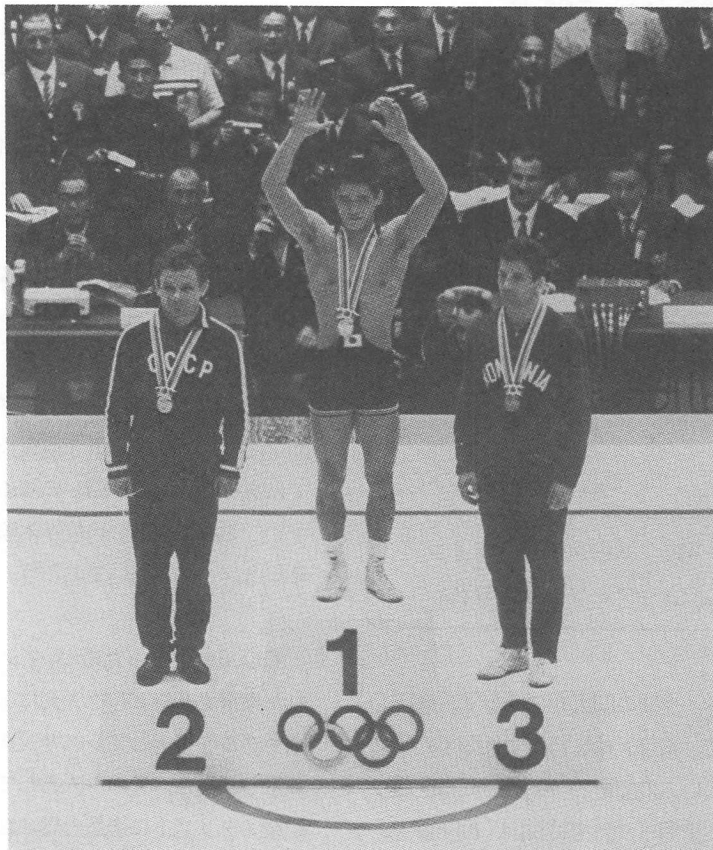
その頂点となったのが、アジアで最初に開催された東京オリンピック大会において日本が5つの金メダルを獲得してレスリング王国の威容を世界に示したとき、その一人として市口政光（OB）が金メダリストに燦然と輝いたことであります。市口先輩に続けが原動力となったのであります。彼は、世界選手権大会（37年）に優勝したのち無敵を誇り、われわれOBの念願していたオリ

ンピック大会、それも特に日本で開催された東京オリンピック大会で優勝したことは、本当に関大レスリング部関係者全体として喜びとするところでもあります。彼は関大卒業後、東京に就職単身下宿生活を営みながら、東京の各大学で練習を積み重ねて東京オリンピックに臨み、各国選手からマークされるなかをよく健闘し、スポーツマン最高の栄誉であるゴールドメダリストの栄冠を獲得し、念願を果たしたのであります。(佐々木)



実は東京五輪では、この市口の快挙のほかに、もうひとつ関西大学の歴史を飾る人物が関与して

いる。関西大学を昭和9年に卒業している大島鎌吉(1985年没)が、その人物ではある。大島は、東京五輪強化対策本部長として、公約「金メダル15個獲得」作戦の総責任者であった。本番では日本選手団長をも務めている。大島は戦後の日本スポーツ界で「実力派」最右翼のひとりであった。その大島が立案した作戦「世界の最先端スポーツ科学の導入」が、この東京五輪を成功に導いたといっても過言ではない。そして、大島が陣頭指揮したスポーツ科学作戦は、スポーツの現場だけではなく、日本人の一般生活にも大きな影響力を与えることになる画期的なことだった。当時の日本



写真▷「東京オリンピック大会」(1964年)・優勝の市口さん・グレコ57kg級

事情から、そのあたりの真相を探っておこう。

◇

東京オリンピックの前年、昭和38年、弘田三枝子という歌手が人気を集めていた。パンチの効いたCMソング「アスパラで生き抜こう」で、世間を賑やかさせていた。そして、田辺製薬のこのCMソングが口火をきいて、ドリンク剤が反乱した時期を、やがて迎えることになる。明けてオリンピックの年、巨人軍の王貞治がリポビタミンD（大正製薬）の「ファイトで行こう」がCMの筆頭になる。そして、超大物スター、三船敏郎が「のんではますか？」アリナミン（武田製薬）と呼びかけて、ビタミン剤広告の激戦時代を迎えることになり、効能を求めて、日本人が、わんさと、薬局に駆けつけたのである。そういう、エポックが、あった。あまた出現したドリンク・ビタミン剤製造元が、東京オリンピック・ムードに便乗して、体力増強、をうたい文句にして一斉に商戦を展開したからだった。効能書には「体力減退」と多くのメーカーが明記して口喧しい評論家を喜ばせもしたが、すべての日本人が直観的に体力減退「時」に効き目ありと読み取って、幻想にも近い期待を寄せたのであった。人びとは、あの昭和30年代の高度経済成長時代に、汗みどろになって働いた。そんな人びとにとって、体力、という語は新鮮だった。本当に元気がつきそうな語感に、特別な意義を求めたのも無理がなかった。体力でもつけて頑

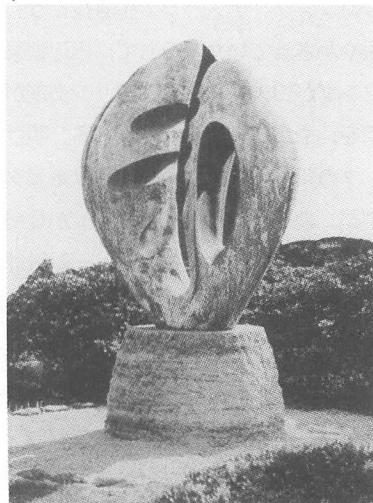
張らなければ、もたなかった。当時の日本人は、現在の日本をつくるために、歯を食いしばって一所懸命に働いた。そうした時代だった。

日本で、体力、という言葉が日常的な生活用語になったのは、実に、東京オリンピックをきっかけにしてのことだった。スポーツ科学は、日本人選手の相対的体力指数が極端に劣っていることを実証してしまい、精神力だけでは勝てない、体力向上こそがすべての鍵を握る、と一斉にガヤガヤ言いだして、巷にも、体力、体力と聞こえるようになったからである。この、新しい潮流と発想の大転換を、マスコミが見逃すはずがない。連日、日本へ上陸したばかりの、スポーツ科学の威力を、書き立てた。そこに、商魂たくましく商人がつけこんだ。企業が科学の語感に弱い日本人を見越して、東京オリンピック大作戦とイメージをだぶらせながら、体力なる魔法語をフル回転で活用したのだった。そして、体力増強には、ドリンク剤を、ビタミン剤を、の一大キャンペーンが展開された。お蔭で体力なる語意が子どもにも判るほどに市民権を得たのだった。そんな副現象もあった。（伴義孝著『スポーツの人・大島鎌吉』）

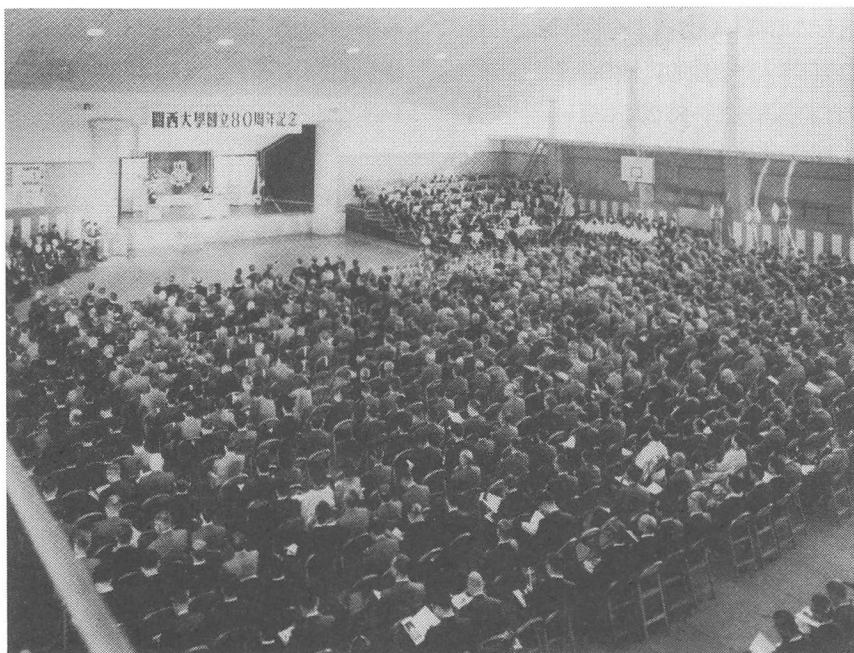
◇

公約を1つ上回る16の金メダルを獲得して東京五輪は大成功であった。そのうちのひとつを市口がもたらした。先輩の大島は、後輩のこの援護射撃に、目を細めたことだろう。（完）

昭和40年は創立80周年にあたる。記念事業の白眉は関大会館の建設であった。これより先校友会は、校友会館の建設を計画し、大阪市内に用地を確保していたが、これを売却し関大会館の建設費にあてた。……この前後、法・文・経・商各学部の研究棟、千里山の体育館（現第1体育館）、工業技術研究所、第4学舎（工学部）、2号館、天六の有鄰館、専門図書館（現円神館）、プール、誠之館クラブ部室棟などの建設が相ついだ。また記念事業の一環として、南米ペルー・アンデスのワイワッシュ山群地域に学術調査隊を派遣し、インカ文明発祥の秘境を探り、多大の成果を収めた。（『関西大学百年のあゆみ』より）



写真▷ 創立80周年記念「和の像」



写真▷ 「創立80周年記念式典」・昭和40年体育館（現「第1体育館」）